

- 令和4年度以降の研究主題・副主題の解説 …… 2～3
- 県大会参加分科会担当表 …… 4

あいさつ

福島県中学校教育研究会社会科専門部長 鈴木 豊



新型コロナウイルス感染症の影響で、昨年度の研究が1年延長されたため、今年度も、研究主題「主体的に社会の形成に参画しようとする態度を育成する社会科の授業はどうあればよいか」、副主題「協働的な学びを通して、考えを深めさせる授業の工夫」に基づき、研究を進めて参りました。

5月の主題研修会及び10月の県中教研研究協議会県北・相双大会が開催できなかったことは誠に残念ですが、各支部ごとに工夫しながら研究に取り組んでいただいたことに深く感謝申し上げます。また、県研究協議会開催予定であった安達支部には、実施に向けた準備等でご尽力いただいたことに改めて御礼申し上げます。

今年度は、前述したような状況から、県社会科専門部として、主題研修会や県研究協議会参加者の作成資料を電子データとしてまとめ、送信・共有することで研究を推進してきましたが、資料には、GIGA スクール構想を踏まえたタブレット端末等のICT 機器を活用した実践事例などがあげられています。各支部において資料を効果的に活用するとともに、今年度の研究成果と課題を次年度以降につなげてほしいと思います。

さて、令和4年度からの3年間は、「主体的・対話的で深い学びを通して社会を生き抜く資質・能力を身に付け、ふくしまの未来を創造する生徒の育成」という新しい基本主題に基づく研究を推進していくこととなります。社会科専門部会としても、今までの研究成果を基に、「主体的・対話的で深い学び」をさ

らに深化させる必要があります。先日、国士舘大学教授（元文部科学省教科調査官・視学官）の澤井陽介先生の講演を視聴した際に、「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業の目線として、「課題は子供に届いているか（子供の疑問や予想）」、「対話は成立していたか（力を合わせる必要性）」、「全員が本時の目標を実現したか（子供の学びの価値付け）」、「子供は満足・納得したか（適切な振り返りの場面）」を大切にしてほしいという話がありました。各支部におかれましては、改めて「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた研究の充実を図るとともに、ふくしまの未来を創造する子供たちに、これからの変化の激しい社会を生き抜くために必要な資質・能力を育成してほしいと思います。

また、次年度は、「持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力を育む社会科の授業はどうすればよいか」という新たな教科研究主題に基づき、研究を推進していくこととなります。基本主題にある「ふくしまの未来」とは、「持続可能な社会」であると捉えることもできます。主題に迫るためにも、各支部・各学校で工夫を凝らし、「地理的分野、歴史的分野、公民的分野における見方・考え方を働かせ、持続可能な社会を実現するためにはどうすればよいか、自分たちはどうしていくべきかを考え、行動できる力」を育成する研究実践を積み重ねてほしいと願っています。そして、3年ぶりの開催となる県中教研研究協議会会津大会が充実した研究協議会となることを期待しています。

結びに、令和3年度の事業にあたり、ご理解・ご協力をいただいた役員並びに会員の皆様にご心より感謝申し上げます。

令和4年度～令和6年度研究主題・副主題について

研究主題：「持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力を育む社会科の授業はどうすればよいか。」

研究副主題：令和4年度 「社会的な見方・考え方を働かせ、主体的に学ぶ力を育てる授業の工夫」

令和5年度 「多面的・多角的に事象を捉え、考察する力を高める授業の工夫」

令和6年度 「協働的な学びを通して、新たな価値を創造する力を高める授業の工夫」

主題を「持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力」と設定し、副主題ではより具体化するために「○○する力」で表現した。

- 令和4年度は、社会的な課題に対して見方・考え方を働かせて主体的に学ぶ力を育てることに着目して副主題を設定した。3年間の研究を進めるにあたっての土台作りとして位置付けた。
- 令和5年度は、令和4年度に獲得した「見方・考え方」を基にして社会的な事象を多面的・多角的に考察する力を育むこととした。なお、「考察する力」については学習指導要領解説P26を参考とし、選択・判断する力や合意形成をする力を含むこととした。
- 令和6年度は、1年次、2年次の研究で育んだ力を基に「持続可能な社会」を実現するために必要な資質・能力の一つである新たな価値を創造する力を高めることとした。これは、協働的な学びを通して、新たな価値を創り出す力を具現化するものである。ここでいう「協働」とは単なるグループ活動等で終わるのではなく、「一つの同じ目的に向かって取り組むこと」を指す。

研究主題及び研究副主題の解説

1 研究主題及び研究副主題

研究主題

持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力を育む社会科の授業はどうすればよいか

研究副主題

- 令和4年度 「社会的な見方・考え方を働かせ、主体的に学ぶ力を育てる授業の工夫」
- 令和5年度 「多面的・多角的に事象を捉え、考察する力を高める授業の工夫」
- 令和6年度 「協働的な学びを通して、新たな価値を創造する力を高める授業の工夫」

2 これまでの研究の成果と課題

これまでの4年間、「主体的に社会の形成に参画しようとする態度を育成する社会科の指導はどうすればよいか」の研究主題のもと進めてきた研究では、年次ごとに副主題を設定して研究実践を行ってきた。その結果、以下のことが確認された。(○：成果 ●：課題)

研究1年次

「社会的な見方・考え方を働かせ、社会との関わりを実感させる授業の工夫」

- 生徒が自ら追究したい、追究すべきだと考える学習課題の工夫が有効である。
- 導入で興味・関心を高めたり、疑問を引き出したりはできたが、課題追究への意欲を50分間持続させる授業づくりが大切である。

研究2年次

「社会的な事象について、根拠を基に説明する力を育てる授業の工夫」

- 教師がICT機器を効果的に活用し資料の精選や提示の仕方を工夫することで、生徒が根拠を基に説明できるようになった。
- 他者に一方的に説明するだけでなく、相手の反応や理解度を意識しながら説明できるようにすることが必要である。

研究3・4年次

「協働的な学びを通して、考えを深めさせる授業の工夫」

- コロナ禍の授業において、タブレット端末やその他のICT機器を活用し、他者の考えを聞き、自分の意見や考えの深化につなげる活動を工夫して実践することができた。
- 授業で獲得した知識や他者の意見や考えから気付いたこと、疑問に思ったことなどを基に、新たな価値を提案したり、発信したりする力を今後身に付けさせるべきである。

3 令和4年度からの研究主題の設定について

(1) これまでの研究の取り組みから

授業においては今後も、地理的分野、歴史的分野、公民的分野における見方・考え方を働かせ、学習課題を追究していくことが大切となる。それを基に、これからの変化の激しい社会を生き抜くための資質・能力を育成し、新たな価値や自分の考えを提案したり発信したりする表現力の育成が求められる。

(2) 時代の要請から

本県では東日本大震災から10年が経過し、復興が進む中で、少子高齢化や過疎化、原発事故後の対応など様々な課題に直面している。これからのふくしまの復興を担う子供たちには、社会科授業を通して、未来を創造する力をつけさせることが求められている。基本主題の「ふくしまの未来」とは「持続可能な社会」と捉えた。そうした社会の実現に向けて、子供たちに公民としての資質・能力の基礎を育成する社会科授業のあるべき姿を検討することが重要であると考えた。

(3) 各支部の意見から

研究主題の設定にあたっては、各支部から持続可能な社会の実現を目指すことができる子供の育成が重要であるという意見が出された。また、これまでの研究成果を踏まえて、社会科の見方・考え方を働かせて課題解決を図る必要性も挙げられた。

以上のことを踏まえ、持続可能な社会を実現するためにはどうすればよいか、自分たちはどうしていくべきかを考え、行動できる力の育成がより一層大切になると考えた。これからの答えのない予測困難な時代において、課題解決に向けて主体的に関わることができる態度を育みたい。

4 研究主題について

(1) 「持続可能な社会」とは

学習指導要領解説には、持続可能な社会について「将来の世代のニーズを満たすようにしながら、現代の世代のニーズを満たすような社会」と明記されている。本県では、東日本大震災からの復興の過程で再生可能エネルギーが注目され、日本最大級の風力発電所や水素製造施設などの建設が進められている。

このように、本県においては持続可能な社会を構築することが喫緊の課題であり、今後ふくしまの復興を担う子供がより切実に自分事として捉えることが重要だと考え主題に据えた。

(2) 持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力について

ここで示す資質・能力とは、「広い視野に立ち現代社会について探究しようとする意欲や態度を養い、予測困難な時代においても、他者と議論する中で合意形成したり、納得解を見つけたりして、社会に働きかける力」と捉える。このような力が基本主題である「ふくしまの未来の創造」のために必要な力ともつながり、これからのふくしまに生きる子供たちにとって重要な資質・能力と考えた。

5 研究副主題について

(1) 令和4年度(研究1年次)

「社会的な見方・考え方を働かせ、主体的に学ぶ力を育てる授業の工夫」

見方・考え方は、教科を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、社会的な事象を見たり考えたりする際の視点や方法である。その上で、学ぶことに興味や関心を持ち、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげることが大切だと考え、3年間の研究の基礎に位置付けた。

(2) 令和5年度(研究2年次)

「多面的・多角的に事象を捉え、考察する力を高める授業の工夫」

社会的な事象は様々な側面をもっており、どの立場から見ると捉え方が異なってくる。そのため、1年次で獲得した力を基に、2年次では、社会的な事象を多面的・多角的に捉え、考察する力を育みたい。

なお、「考察する力」については学習指導要領解説社会編P26・P27を参考にしており、選択・判断する力や合意形成する力等が含まれる。

(3) 令和6年度(研究3年次)

「協働的な学びを通して、新たな価値を創造する力を高める授業の工夫」

3年次は、1年次、2年次の研究で育んだ力を基に協働的な学びを通して、「持続可能な社会」を実現するために必要な資質・能力の一つである新たな価値を創造する力を高めたいと考えた。ここでいう「協働」とは単なるグループ活動等で終わるものではなく、「一つの同じ目的に向かって取り組むこと」を指す。持続可能な社会を実現するために、目的を同じくして考察、議論、提案するといった活動を通し、社会参画の在り方を考えさせたい。

6 研究1年次の副主題の解説

(1) 「社会的な見方・考え方を働かせ」とは

社会的な見方・考え方については学習指導要領で示されており、社会的現象等の意味や意義、特色や相互の関連等を考察したり、社会に見られる課題を把握してその解決に向けて構想したりする際の「視点や方法」である。見方・考え方は持続可能な社会を実現するために子供たちに身に付けさせたい資質・能力の礎となる。そのため教師は、生徒が社会的な見方・考え方を働かせることができる授業を意図的に構成することが大切となる。

① 社会的な見方・考え方を働かせること

社会科としての本質的な学びを促し、深い学びを実現するための思考力、判断力の育成につながる。また、生きて働く「知識・技能」の習得に不可欠であること、主体的に学習に取り組む態度にも作用することなどを踏まえると、資質・能力全体に関わるものである。

② 社会的な見方・考え方を働かせた子供の姿

社会的な「視点や方法」を用いて、社会的現象について調べ、考えたり、選択・判断したりする学びを通して、課題を追究・解決する子供の姿である。これらの学びを行うことで「視点や方法」がさらに鍛えられ、より深い学びにつながっている姿を指す。

(2) 「主体的に学ぶ力を育てる」とは

主体的に学ぶ力を育てるには、次の具体的な姿が見られるようにする。

① 興味・関心をもっていること

② 見通しをもっていること

③ 粘り強く取り組んでいること

④ 自分の学びの振り返りができること

特に、②については、子供自身が見通しをもてるようにすることで、学習の連続性が生まれ、自分の「学ぶべきこと」「考えるべきこと」を理解することができ、学習への主体性をもたせると考える。

社会科では主体的に社会的現象について考え、学びを深めることを通して持続可能な社会を実現するために、必要な資質・能力を育みたい。

(3) 「社会的な見方・考え方を働かせ、主体的に学ぶ力を育てる」ための手だてについて

以下に手だてを挙げるが、あくまで一例であり、各支部で工夫しながら取り組んでいただきたい。

① 興味・関心をもたせる

【導入の場面】

- ・ 子供たちが興味・関心をもち、学習意欲を高めるような資料の提示を行う。
- ・ 自分事として捉えられる問いを工夫する。
- ・ 学習課題の設定においては、子供たちの疑問や問いを引き出せるように工夫する。
- ・ 学習課題に対する予想や考えを生徒それぞれにもたせ共有できるように工夫する。

【課題追究の場面】

- ・ 他者と議論する中で、形成した考えをさらに深めたり、再構築したりするために、考えを揺さぶる資料を提示する。

② 見通しをもたせる

【単元指導計画の工夫】

- ・ 1単位時間の構成のみならず、単元構成も重要となるため、単元を通した学習計画を作成する。単元構造図の作成も有効である。
- ・ 単元と単元を比較し類似・差異などが発見できるように、これまでに学習した単元との関係性に着目させる。

③ 粘り強く取り組ませる

【ICTの活用】

- ・ 主体的に調べさせるために一人一台のタブレット端末を最大限に活用し、探究させる。
- ・ 主体的に自己の意見や考えを表現できるように授業支援ソフトを活用し、プレゼンテーションソフトでの発表を積極的に行う。

【課題追究の場面】

- ・ 考察したことを伝え合う中で、比較したり、関連付けたりして自分の考えを練り上げる場面や方法を工夫する。
- ・ 自分の意見や考えの根拠となる資料を選択し、他者に説明する場を設定する。

④ 自分の学びを振り返らせる

【まとめ・振り返りの場面】

- ・ 学習の過程を振り返ることができるような構造的な板書を行う。
- ・ 自分の学びを振り返らせ、何がわかって何がわからなかったのかを整理する時間を確保する。
- ・ ノートやワークシートを活用し、自分の考えの変化や深化に気付いたり、話し合いの内容などを記述したりできるように工夫する。それらを、まとめ・振り返りの場面で活用する。
- ・ 振り返りのプリント等を用意し、継続的に記入させることも考えられる。その中で、新たに疑問をもたせたり、追究意欲を高めさせたりする。
- ・ 持続可能な社会づくりのために、学んできたことと実際の社会の在り方との関わりが感じられるような振り返りを行う。

7 1年次の研究計画と研究分野

(1) 研究計画

- ① 主題報告(5月末まで 各支部)
 - 主題の共有 ○ 支部研究計画の立案
- ② 支部研究協議会(7月下旬まで 各支部)
 - 研究実践の経過報告と今後の進め方の確認
- ③ 県研究協議会会津大会(10月)
 - 公開授業(両沼支部の中学校)
 - 代表支部の研究発表と協議
- ④ 県大会報告(10月～11月 各支部)
- ⑤ 研究部報第55号の発行(3月)
 - 本年度研究のまとめと次年度の確認

(2) 研究分野

- | | |
|-----|------------------|
| 1学年 | }各自が地理的分野と歴史的分野の |
| 2学年 | |
| 3学年 | 各自が歴史的分野と公民的分野の |
| | いずれかを選択 |

【参考文献】

- 「中学校学習指導要領解説社会編」文部科学省 東洋館出版社
「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
国立教育政策研究所教育課程研究センター
「見方・考え方 社会科編」澤井陽介 加藤寿朗 東洋館出版社
「教育科学 社会科教育」明治図書「授業の見方」澤井陽介 東洋館出版社

令和3年度福島県中学校教育研究会社会科研究部組織一覧

部長 鈴木 豊			副部長 大和田康夫 ・ 八木沼孝夫 ・ 川口 和彦 ・ 反畑増生 ・ 新家弘久		
支部	支部長名	勤務校	支部	支部長名	勤務校
福島	鈴木 豊	大鳥中	北会津	湯浅 英生	北会津中
伊達	金子 雄樹	松陽中	耶麻	植村 信	北塩原一中
安達	大和田康夫	二本松二中	両沼	川口 和彦	金山中
郡山	半沢 一寛	西田学園	南会津	室井 正之	田島中
岩瀬	八木沼孝夫	須賀川一中	相馬	反畑 増生	向陽中
石川	有賀 義人	石川中	双葉	大沼 俊之	双葉中
田村	吉田 圭輔	常葉中	いわき	新家 弘久	豊間中
東西しらかわ	菊池 篤志	表郷中			
事務局 総務 阿部 哲 (附属中)		庶務 樋上 聖 (郡山四中)		会計 川村 国夫 (附属中)	

各支部代表の参加分科会配当表

		福島	伊達	安達	郡山	岩瀬	石川	田村	東西しらかわ	北会津	耶麻・両沼	南会津	相馬	双葉	いわき
R 4	地理						○	●	●	○			○		○
	歴史	○	●		○	●					○				○
	公民	○		○	●	○						○			●
R 5	地理	○	○		●	○					●				○
	歴史			●	○				○	●		○			○
	公民	●				●	○	○					○		○
R 6	地理	●		○	○	○						●			○
	歴史	○				○	●	○					●		○
	公民		●		○				○	○	○				●

○=参加 ●=発表

① 各分野に5～6支部を配当する。

※ 会員数が30人以下の支部は1人から、60人以上は3人からの参加とする。

※ 岩瀬支部は会員数が30人(今年度)となっているが、いわき、郡山、福島支部について人数が多いため2人ずつの割当とする。(支部の実態に応じて発表のみの参加でも構わない)

② 発表数は2支部とする。

③ できるだけ均等に。数・地区に偏りがないようにする。

④ 3年間で1度は発表があたるように配慮する。

